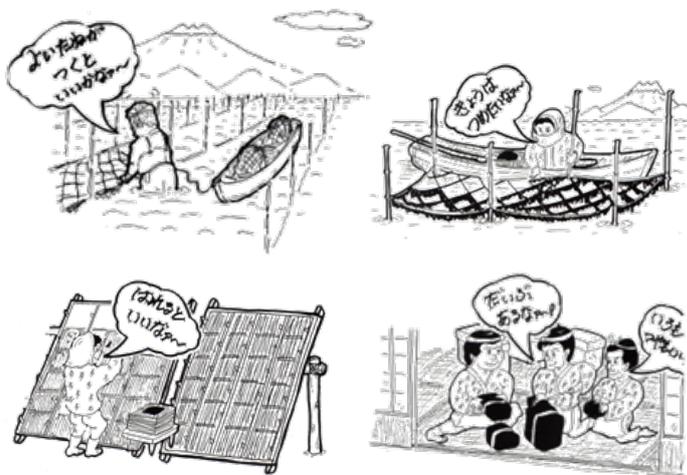


第六章 地域の変遷

第一節 企業進出前の周西

◆海苔養殖の成功

周西は江戸末期まで半農半漁の村だった。農業は田畑を主体とした農耕で、人々はこれにより生計をたてていた。漁業は、ほとんどの家が打瀬網漁(てぐり)で小糸川河口付近は、真水と海水が適量に混じりあう栄養海水が東京



海苔作り作業

湾環流に洗われる天恵の貝類漁場でもあった。

文政四年(一八二二)、江戸の海苔商人近江屋甚兵衛が人見村の小糸川河口付近で海苔養殖に成功した。これを契機に、坂田は安政五年(一八五八)、坂田浦に筏が建てられ、大和田では明治十一年(一八七八)、海苔作りを始めた。この年、大堀村の平野武次郎が新しい海苔移植法を発見。明治一六年(一八八三)には、実用的な移植技術の完成にこぎつけた。これにより村の生活構造が、従来の「半農半漁」から「海苔主体の半農」へと大きく変貌していった。

◆漁業組合の変遷

明治三四年(一九〇一)公布された漁業法に基づいて翌年、周西村に人見漁業組合・大和田浦漁業組合・坂田漁業組合が設立された。この三漁業組合はすべて海苔養殖を主体に漁業活動を展開した。

人見漁業組合事務所は明治三十七年(一九〇四)、人見神社山麓下の神門側



周西村人見漁業組合

に建てられた。

大和田浦漁業組合事務所は大和田自治会館付近にあった。現在の大蓮寺本堂はこの建物を移築したものである。

明治四三年(一九一〇)に漁業法が改正され、県や郡の水産会の指導を受けて海苔養殖はとくに大きく進展した。坂田漁業組合事務所は花の井に建設され、大正一二年七月一二日落成した。

昭和一八年四月、周西村と八重原村



旧坂田漁業組合事務所（現坂田青年館）

が合併して君津町誕生。翌年七月、人見・大和田・坂田の三漁業組合が統合して、君津町漁業会として発足した。昭和二四年、君津町漁業会が解散し、人見・大和田は君津漁業協同組合（君津漁協）、坂田は坂田漁業協同組合（坂田漁協）として分離独立した。坂田や大和田が分離を希望した背景には、自浦の漁場を有利に確保したいという気持ちが大きく働いていたようである。

第二節 八幡製鐵の進出

◆ 地域開発の波

昭和三三年、千葉県が「千葉県総合開発計画」を策定したのと前後して同年一月、君津町長と町幹部および君津漁協と坂田漁協に対し埋め立て申請者主催の「海岸埋め立て説明会」が開催された。

昭和三五年九月二二日、君津漁協に県知事から正式に地先海面埋め立ての要請があった。

◆ 漁業権譲渡と補償

その後、君津漁協は幾多の紆余曲折があつて、昭和三六年七月二〇日の臨時総会で漁業権譲渡を決定した。進出企業は八幡製鐵株（現新日鐵住金株式会社）だった。

君津漁協（組合員二一七人）の漁業権譲渡（ママ）は、昭和三六年四月に補償金の内示があり、同年七月二〇日の臨時総会で記名投票の結果、賛成一

五七、反対五一、無効一、賛成率七五％で漁業権譲渡を決定。三二万五〇〇〇坪の区画漁業権と一三五万六〇〇〇坪の共同漁業権を放棄した。支払われた漁業補償は総額一四億八〇〇万円（一漁家あたり平均七七〇万）だった。

坂田漁協の漁業権放棄（ママ）は、昭和四〇年五月に決定し同月二六日、千葉県と漁業補償協定に調印した。締結が遅れた背景には、坂田漁協の黄金時代を築いた漁業者の意地と誇りがあつたようだ。

昭和二六年頃になると、東京湾は工場排水による汚染、船舶に起因する重油被害が各浦で発生してきた。このような環境の変化で発生する「海苔腐れ病」の対策として千葉県市原の松ヶ島漁協が実験していた「浮動式養殖法」に着目し、辛抱強く研究改良することでも海苔腐れ病を打破した。また貝類養殖についてもアサリ・ハマグリ・稚貝投入など収穫漁業から栽培漁業へと転換をはかり成功を収めた。

昭和二九年「全国海苔貝類漁業協同組合連合会」主催による第四回大会（現



人見・大和田・坂田の海岸線と周西の丘陵
(昭和35年頃)

場の人々による研究発表会)において坂田チームは水産庁長官賞を獲得している。さらに、海苔共同販売体制をしくなど組織の基盤強化も進めていた。このような状況下での漁業権放棄と漁業補償は死活問題であり、晴天の霹靂（ヘキレキ）だったようだ。漁業権放棄は人見・大和田・坂田漁

民にとって先祖代々受け継いできた漁場を失うという単純な感傷ではなかった。ようやく軌道にのってきた海苔養殖業を放棄することに相当な抵抗があり容易に受け入れ難い複雑な問題だった。地元の人たちが交わす放棄・譲渡論にその思いが込められている。

第三節 君津製鐵所の建設

❖ 海面埋立て

君津漁協との間で漁業補償問題が



法線杭打ち（小糸川右岸）
(昭和36年8月)

解決した後も隣接した青堀漁業協同組合との調整問題で予定よりかなり遅れ、昭和三七年一月一日から約四八万四〇〇〇㎡の第一期埋立てを開始した。

埋立て工事に先立ち昭和三六年八月、小糸川右岸で法線の杭打ち。冷延工場予定地付近でのボーリング調査。一二月、浚渫船第一号君津丸が人見浦に到着、君津製鐵所埋立開始送泥式典が行われ、君津製鐵所建設の第一歩がスタ



埋立開始送泥式典
(昭和36年12月)

トした。工場建設予定地の海面埋立ては、主に人見・大和田丘陵地の山土が用いられた。

❖冷延工場操業

昭和三七年一月から開始された埋立ては秋に完了し、昭和三九年二月十七日、冷延工場建設が開始した。



埋立地に完成した冷延工場
(昭和40年)

昭和四〇年二月一日、君津製鐵所が発足。同年四月一日、冷延工場調圧ミル設備（第一冷間圧延機 五スタンド

タンデムミル）が操業開始し、君津製鐵所の第一歩がスタートした。

❖人見・大和田丘陵の開発

昭和三七年、大和田丘陵の掘削工事に先立ち文化財保護のため大和田社宅B棟公園の上、三〇m付近にあった妃塚古墳の発掘調査が行われた。



妃塚古墳発掘状況
(昭和37年2月12日)

掘削残土は君津製鐵所建設予定地の海面埋立てに使用される一方、昭和四三年には掘削された跡地に低層（四階建てB棟群）、高層（一一階建てA棟群）の社員用社宅が建設されるなか、北九州からの引越しコンテナが続々と到着し未完成の建物に入居していった。その後この地域は、独身寮・グラン



大和田社宅A、B棟建設状況
(昭和43年6月7日)

ド・体育館など福利厚生施設を完備する「マンモス団地」となった。

❖銑鋼一貫体制確立

昭和四二年三月六日、人見・大和田浦には浚渫大船団が集結し大規模な浚渫作業が開始する。同時に、四月厚板工場、九月第一高炉などの建設がはじまった。翌年、スパイラル鋼管・厚板工場・特殊電縫鋼管設備・コークス工場・第一高炉火入れ・転炉工場・分塊

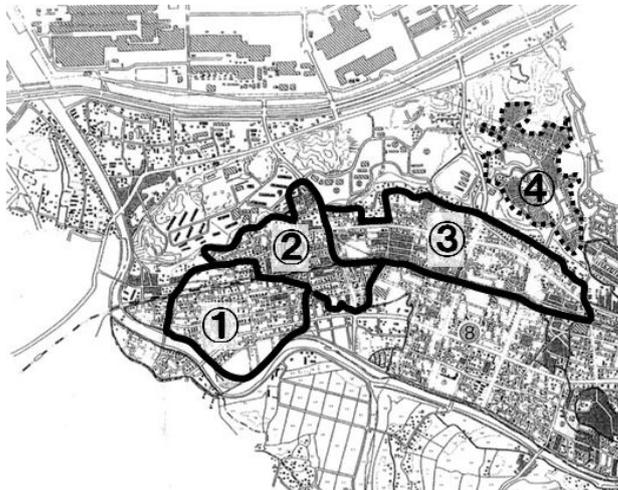
工場・熱延工場などが操業を開始。一月二月には、君津製鐵所銑鋼一貫体制が確立した。



八幡製鐵株式会社君津製鐵所工場群
(昭和44年1月4日 写真提供:故渡辺忠純)

第四節 都市づくり

❖ 周西地域の土地区画整理事業
八幡製鐵の君津進出にともない、君津町は計画的都市づくりの方針を固め、昭和三七年「都市計画区域」の指定、



土地区画整理事業実施状況図

昭和三九年「都市計画用途地域」の指定、昭和四〇年には「都市計画道路」の指定を受けるなど、都市基盤作りの骨格をなす基盤固めに着手した。
都市基盤作りにあたっては、組合施行による土地区画整理事業を強力に押し進めている。

土地区画整理事業の概要は、人見土地区画整理組合①の事業年度、昭和四九〜平成三年で施行面積六〇、一ha。

大和田土地区画整理組合②の事業年度、昭和四三〜五八年で施行面積三七、八ha。坂田土地区画整理組合③の事業年度、昭和四四〜五八年で施行面積六〇、二haとなっている。

❖ 君津台宅地開発事業

昭和四四、四五年頃、この丘陵地帯が新日本土木株式会社、総武都市開発株式会社の所有地となり宅地開発工事が進められた。

〈君津台造成記録〉

* 昭和四四年一〇月二〇日許可分

君津市坂田字霞池山・東仲田・鳥巢

懸山

* 昭和五〇年三月一日許可分

(第一工区)

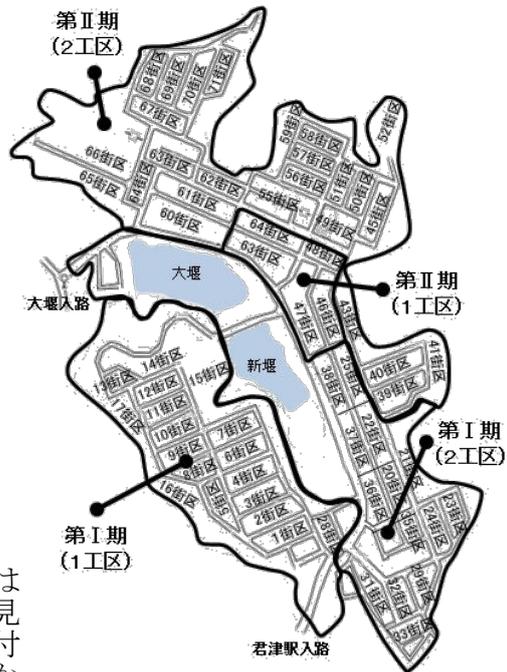
大関谷・三ノ輪作・西柳ヶ作・原・仲町

* 昭和五〇年三月一日許可分

(第二工区)

西柳ヶ作・東柳ヶ作・霞池山・東仲田・鳥巢懸山

* 昭和五〇年三月一日許可分



君津台団地造成概略図

〈造成時期について〉

昭和五〇年三月一日

許可（新日本土木株式会社）分については、昭和五〇年三月一二日が着手年月日となっている。従って、昭和五〇年三月一二日から造成工事の施工が始まったと考えられるが、それ以降の着手届け

は見付かかっていない。通常であれば断続的に造成工事がおこなわれたと推測できる。

（「新日本土木株式会社」資料）

✦写真でたどる地域の変貌

周西は八幡製鐵の君津進出で大きく変貌した国内で比類ない地域である。

短期間での海浜巨大製鐵所建設、山を削った跡地に出現したマンモス団地、人口の急激な増加、都市区画整理事業で変容した市街地。半世紀が経過した今日、薄れつつある記憶を歴史の「語り部」である写真で振り返る。

（第二工区）
打越・明王塚・鳥巢懸山・当神免・
鵬口・東仲田・西仲田・関山・新関
山・三枚畑

*昭和五〇年三月一日許可分
（第二工区）

大関谷・打越

*昭和五七年一二月二七日許可及び昭和五九年一〇月一日許可分

（第一工区及び第二工区）

衛門ヶ作・当神免・鵬口・東仲田・
西仲田・三枚畑・本名輪・鳥巢懸山

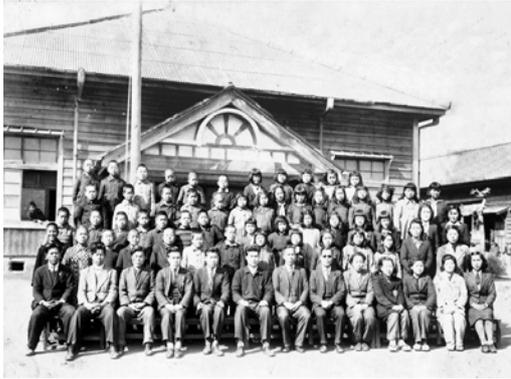
資料一…八幡製鐵進出前の周西



昭和44年4月 北子安付近を走るSL



農作業風景(旧周西小学校付近)



旧周西小学校卒業記念写真



坂田の茅葺きの家



坂田のお神輿



区画整理前の大和田



旧周西小学校正門



大和田「銚」奉納(人見神社大祭)



人見消防団 第11分団



河岸より中橋・人見山を望む



人見橋開通式



人見神社「波の伊八彫刻」昭和 45 年焼失



神門の百万遍講



人見山から見た神門と埋立工事



小糸川河口に最初にあられた浚渫船



小糸川河口で行なわれていた「船おろし」



潮干狩り



生活の重要な糧だった「海苔養殖」

資料二…写真で振り返る

「周西地域五〇年の変遷」

※折り込み(A3判)参照

- ・昭和三〇年代 漁業で栄えた人見・大和田・坂田
- ・昭和三六年 製鐵所の建設始まる
- ・昭和三七年 航空写真で見える周西
- ・昭和三六年 開発進む大和田丘陵

資料三…写真でたどる

「市街地の移り変わり」

※折り込み(A3判)参照

- ・昭和三八年 旧周西小学校
- ・昭和四〇年 焼失前の人見神社
- ・昭和四五年 山の上にあった君津クラブ
- ・昭和四八年 橋上駅工事始まる
- ・昭和四八年 旧君津駅舎閉鎖
- ・昭和五〇年 旧君津町役場
- ・昭和五一年 イトーヨーカ堂開店
- ・昭和五二年 完成間近君津市役所
- ・昭和五三年 君津駅(南口)
- ・昭和五四年 水道山タンク工事

- ・昭和五六年 ポピンズ開店
- ・昭和五七年 君津・畑沢線
- ・昭和五九年 スーパー富分開店
- ・昭和六〇年 君津駅特急電車出発式
- ・昭和六二年 アピタ君津店開店
- ・昭和六二年 ジョイフル本田開店
- ・昭和六三年 漁業資料館完成
- ・昭和六三年 人見大橋開通式
- ・平成二年 君津市民文化ホール落成
- ・平成五年 君津警察署オーブン
- ・平成一年 保健福祉センターふれあい館開館
- ・平成一四年 君津市中央図書館開館
- ・平成一八年 周西公民館開館
- ・平成二二年 生涯学習交流センター開館
- ・平成二四年 人見保育園開園

第五節 転業・転入時の記憶

✦思い出

人見浦の埋立ては昭和三十二年頃、一企業による埋立て計画が組合から発

表されたことがあったが、海苔養殖に
対する漁民の執着が強く殆んど問題に
されなかった。その後、内湾に工業化
の波が押し寄せ、既に五井・姉ヶ崎地
区まで埋立てが進み、大工業地帯に変
貌しつつあった昭和三十五年、人見浦
にも来るべきものが見ついにきた。八幡
製鐵の進出計画の知らせである。

埋立ての話聞いたとき、将来の海
苔作りに良い展望がもてないにしても、
埋立てになれば吾々は丘に上がったカ
ツパ同然、転業の不安からにわか賛
成する気にはなれなかった。翌三十六
年、埋立ては条件交渉の段階となり、
一部の反対を押し切り補償金六百三十
五万円を以って埋立てが決定した。こ
れも時代の流れとはいえ海苔作りにた
いする不安と補償金への魅力のせいだ
ったと思う。

製鐵所の建設は急ピッチで進められ、
埋立て地に飯場が続々と建ち並び、一
万人ともいわれる労務者が集まってい
た。当時神門には給食施設が少なかっ

たので、食事ときには大変な混雑が繰りかえされていた。私は製鉄所建設道路として市に提供した残り分の土地があったので、急に食堂を始めようと思った。急いで稲を刈りとり埋立てをし、昔の波打ちぎわに近い所だったので、「ナギサ」と名付け、バラック建ての食堂を開店した。時は昭和四十二年十月十二日、私が五十三才、妻が四十八歳で正に老境にさしかかっていた。板前二人と女店員七、八人を雇い馴れない仕事に多忙を極めた。全国から集まった労務者にはイレズミの者、酒ぐせの悪いものがたくさんいて、接客には大変苦労した。喧嘩と食い逃げのお客の始末にはほとほと困ったこともあった。目まぐるしい時代だった。

(守)

◆漁業権譲渡へ

昭和三十年代、千葉県は従来の農水産業から鉱工業生産への転換を図っており、当時木更津・君津地区もいずれは埋立かと誰もが感じていた。昭和三十

五年十一月二日には八幡製鐵の進出が正式に発表された。当初予定地は木更津南部が予定されていたが、木更津は漁業権問題が長引き、又自衛隊の飛行場による建築物の高さ制限等で工場誘致の場所は次第に南下していった。

君津町としては「どうせ誘致するなら大企業がいい」との考えから八幡進出には反対はなかったと言えるが、多くの漁業組合は先祖伝来の海への責任感、転業後の収入、転業の失敗の不安などから絶対反対の立場をとる中、君津漁協は話を聞こうとする姿勢があった。それから条件交渉に移り、様々な経緯があったが、三十六年七月三十一日の総会で漁業権を譲渡することを承認、八月十日に県庁で君津漁協と県庁の妥結調印が行われた。妥結するまでは君津漁協も賛成派、反対派があり大変な事態だったが、この後四十年に坂田も妥結した。今後ますます君津製鐵所の発展を祈るが、同時にその海で生計を立てていたものが、先祖伝来の漁

場を将来の不安を残しながらも譲渡したことを忘れず、地域と一体になって豊かなまちづくりを進めてもらいたい。

(所内報「きみつ」掲載文より抜粋)
◆転業の決意

私は、半農半漁の家の長男として生まれ育ってきたので、家業を継ぐのは当然と思っていました。したがって勉強もあまりせず、小学校の頃から夏休みになると、親父と一緒に沖漁にいたり、海苔や農業を手伝い、早く一人前の仕事ができるように頑張っていました。ですから、中学校の卒業式から帰ると、その日から家業に精を出していました。

ところが六年後、突然漁業権を譲渡し、転業することになりました。「愚痴を言ってもしょうがない、やるっきゃない、俺はまだ二十二歳で若い」。幸いなことに叔父さんが機械屋をやっていたので、将来自分の工場を持つことを夢見て、機械工になることにしました。補償金で旋盤を購入し、朝七時から

夕方七時まで、絶えず叔父さんの仕事の仕方を見ながら一所懸命仕事を覚えました。旋盤工は一日中立ち仕事なので、最初の頃は足腰が痛かったが、半年もすると慣れてきました。仕事が終わると、その日した仕事を振り返りな



神門 澄雄鉄工所

がら、こうしたらどうだろうか？あしたらどうだろうか？と考える毎日でした。しかし、私は子どもの頃から物を作るのが好きでしたので、毎日が楽

しみでした。そのうち、だんだんと複雑な加工をするようになってくると、旋盤加工にも数学が必要になってきました。

例えば、三角関数を使った「テーパ―計算」やピタゴラスの定理を使った「円弧の計算」等ですが、前述したように勉強していないから解りませんでした。そこで数学の参考書を読んだり、現役の高校生に教えてもらったりして、どうにか計算できるようになりました。そんな苦労もありましたが、昭和五十三年、町工場の親父になることが出来ました。また、昭和六十三年には漁業資料館が開館され、昔使っていた沖漁や海苔の道具が、生きた教材として活用されるようになり、資料も転業することが出来ました。

(石井澄雄)

✦故郷と決別

新天地君津への転勤を素直に受け入れたのではなく、断腸の思いを残して、故里の親兄弟に離別を告げた。それも

九州で育ち学んだことに愛着があったからだ。駅での離別、夜行の寝台列車の車窓からは、見送りに来た親兄弟の涙が見え、振る手にも寂しさ、辛さが胸を突いた。込み上げる気持ちを押しえて、親子とも目を赤く染めていた。他の転勤家族も全（ママ）想いで、目を染めていた。こうして、遠くて近い



親族や友人との別れはつきない
～君津製鉄所 10年の歩み～

君津へと出発したのであった。東京に着き、担当者を迎えのバスで東京を見物した後、川崎から木更津行

きのフェリーで木更津港に着いたが、その間に製鐵所の姿は見えず、ただ海ばかりであった。宿泊旅館は、家族ごとと違っていた。私たちはふじや旅館で一泊後、入居すべき大和田社宅A二棟に向かった。A二棟はまだ建設中で、一階建ての建物の五階までしか入居できていなかった。周囲には網が張られ、クレーン車は建設資材を荷揚げしていた。入居の荷物を搬入しようにも、正面玄関、エレベーター等中央口は工事中で、非常階段の網をくぐって入ったのである。他のアパートは基礎工事の中で、A二棟だけが一階まで出来ていた。

建設と毎日忙しく、海辺には新しくできた砂丘が広がっていた。建設現場に行くバスは、軟弱な地盤でよく沈んだ。夜間は暗くて道がわからず、段差から落ちて運転手も苦勞していた。行く先々は晴天でもぬかっていたので、長靴をはいて通勤した。

埋立て、建設は毎日進み、搬入される設備の資材は、目を見張るほどの大きさが多かった。これが君津製鐵所なのだと思います。作業員は少数精鋭で、工場の設備稼働に励んだ。初溶鋼を鑄込み、無事終了すると、今までの嫌な気持、辛かった苦勞がすべて消えてしまった。工場立ち上げの夢がかない、大きな感動へと変わったのである。

✦九州より君津へ

昭和四二年秋、門司から寝台特急(はやぶさ)に乗り数組の家族と九州を後にして君津に來ました。大人達は親兄弟や知人との別れ、遠い千葉での生活に、寂しさや不安を感じていたよう

(安部)

すが、小学生だった私は旅行に行く時のような楽しい気持ちでした。

八幡製鐵所からの民族の大移動が話題になった頃で、同年代の子供たちが続々と転入してきました。転入生に慣れていた地元の子供達は、次々と来る新入りを快く迎えてくれましたが、次々に来る転入生の名前を覚えるのが大変だったようです。戸惑っていたのは大人達で、通じない方言が多かったです。



寝台特急「はやぶさ」

例えば「きな」。『こっちに來い』と言われたらと思つて地元の方が『何の用?』と聞くと『呼んでない』と答えます。『きな』とは九州弁で黄色の事です。今では笑い話ですが当時は本当に困つたと聞きました。

九州を離れ四十五年、戻る事なく住

み続けているのは、温暖な気候と人の温かさです。新しい風は時に疎ましく思われがちですが、地元の方々は優しく受け入れて下さり感謝しています。

(五十代 女性)

◆地元出身者の悩み

昭和四三年四月一日、君津製鉄所に入社しました。会社の中は九州弁一色で、千葉県生まれの私には通訳がいるほどでした。特に極めつけは「なおしておけ」でした。ある日、作業後の掃除も終わり先輩から「これ、なおしておいてくれ」と畳箒を渡されました。「ハイッ」と元氣よく返事したものの、渡された箒を見たらどこも壊れていません。いくら見ても壊れていないので先輩のところへ「アノー、これどこもこわれていませんけど」と持っていききました。先輩はキョトンとして「俺は修理しろと言っていないゾ、元に戻しておけと云ったんだ」私はやっと納得しました。その後は、すっかり俄か仕込みの九州弁にはまり、生まれ故郷の言

葉を懐かしく思うようになりました。

(T・K)

◆「チツケッタ」で安心

あれは昭和四三、四年の頃でしたか、八幡から転入の生徒たちが急増して、クラスの三分の二を占めるようになって、私達、正直いって心配はしていました。でも地元との交流は非常にスムーズでしたね。

言葉の心配もあまりなかった。「チツケッタ」とは、「ジャンケンポン」「グーチョキパー」のことですが、見るうちに、皆これでやるようになって、これなら大丈夫と思いました。

問題は一時、一クラスに七六人もいた「すし詰め教室」でしたが、これも校長の努力と父兄の協力で、校舎の増築・教師・人の増強など、チームワークで勝ちとつたのを覚えています。

(K・K)

△小林一茶の旅日記

一茶は「花嬌仏の百ヶ日」に来訪した。

七月

一六 風雨 午刻雨止 風不止

夜奥州男五十才計旅人荒井村

(富津市新井) 宮の木二首クク

り死 同夜坂田村(君津市坂田)

妙見別当青蓮寺弟子 同村の男

三人殺して逃亡

また、

八日 廿三番 薬王寺(君津市坂田長

福寺) 是より阿波土佐ノ国さか

へ迄十り 御関所有 是より廿

四番迄十り しめて廿壱り 土

佐国 御関所有 白濱村泊り

十日 東寺(二十四番最御崎寺・室戸

岬の突端、国札は君津市人見の

青蓮寺) 参拝。女人きんぜい 本

尊拝礼(廿五番津照寺の記録が

ない。富津市大堀妙長寺)

花嬌仏とは、富津村の名主織本嘉右衛

門の妻で對潮庵花嬌の俳号。

(『上総よもやま話』高崎繁雄著)



開発前の君津台 大堰谷・新堰谷



君津台宅地造成事業
(昭和50年代 開発進む第1期工区)